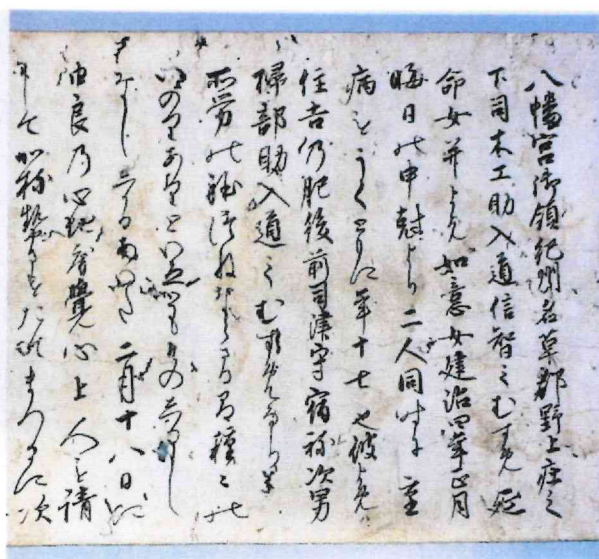


たくせんき 野上八幡宮と「託宣記」

野上八幡宮の祇園祭が7月16日から開催されました。3年ぶりということで大変にぎわっていました。そこで、野上八幡宮についてあらためて紹介します。社伝によれば、欽明天皇の宣命により心神天皇の霊を勧請し、社殿を造営したと伝えられています。永延元年（987）石清水八幡宮の別宮となり、万寿2年（1025）には京都御所からの宣命により、本殿、末社に至るまで造営され、祭事は石清水八幡宮に準じて行われるようになりました。天文10年（1541）根来宗徒の来襲により焼失しましたが、永禄13年（1570）に竣成遷宮されています。その後、江戸時代に大修理が行われ、明治以降、屋根の葺替や解体修理などを経て現在に至っています。昭和19年に本殿、拝殿、摂社武内神社本殿、同じく平野今木神社本殿並びに高良玉垂神社本殿の5棟が国の重要文化財に、また、昭和37年には絵馬殿が県の重要文化財に指定されています。



野上八幡宮「託宣記」上巻

ところで、野上八幡宮には多くの歴史的文献・資料が残されています。そのうちの一つに野上八幡宮「託宣記」上中下3巻があります。建治4年（1278）、野上荘下司信智の娘が重病にかかり、禅僧の無本覺心を呼び、加持させたところ、八幡神があらわれ、八幡神と覺心らが30にもわたる問答を繰り広げた様子を記したものです。この問答では、宗教的なものだけでなく、当時の社会的背景も反映されています。文永の役（元寇）のことや疫病の流行についてもふれられています。当時の人々が追善・怨霊鎮撫・災厄・災害除去などを禅僧に期待していたことや武士もさまざまな苦悩を抱えていたことがわかります。（裏につづく）

野上八幡宮と法燈国師の墓に開山堂があります。中には袈裟をまとった法燈国師の彫像が安置されています。その法燈国師こそが無本覚心です。法燈国師は金山寺味噌を日本に持ち帰ったと伝えられ、また由良興国寺の開山に尽くした僧です。9月2日から県立博物館で法燈国師に関する企画展が開催されます。野上八幡宮と法燈国師の関係を詳しく知ることができますので、この機会に県立博物館に足をお運びください。



開山堂

宣命：天皇の命令を記した文書
 勧請：神仏の分霊を招き入れること
 別宮：本宮に付随する神社
 竣成：大規模な建築物などができあがること
 遷宮：神殿を造宮または改修するとき神体に移すこと
 追善：死者の冥福を祈ること
 怨霊鎮撫：天災や疫病の発生を怨霊の仕業とみなし、これを鎮めること



法燈国師像

写真：

特別展『中世の村をあるく
 一紀美野町の歴史と文化ー』
 和歌山県立博物館 2011 より

(令和5年8月12日)